

Title	漢詩文と定家の和歌
Author(s)	長谷, 完治
Citation	語文. 1966, 26, p. 27-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68572">https://hdl.handle.net/11094/68572</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 漢詩文と定家の和歌

長谷完治

和歌と漢詩文との交渉は、野中川原史満の哀悼歌(孝徳起所載)以来、和歌史を通じて綿々と続いているわけであるが、古代回帰の思いによつて歌風の一端が規定されている新古今時代の漢詩文撰取の方法には、古今風の知巧的表面的な受容態度と自から異なる点の存するこゝとは容易に想像されよう。それが定家の作品では如何なる様相を呈しているのであろうか。

無名抄にいう「立居起き臥しに風情をめぐらすといふ事なし」(頼政歌)は、俊恵一個の頼政評にすぎないけれども、同時に平安末期歌壇の行詰った状態を暗示しているように思われる。俊成前後から歌合の判詞中に「わりなき風情」「つねにめなれた心」等を排し「ことば」「心」「風情」の「たくみさ」「めづらしさ」「新しさ」を庶幾する傾向が顕著になるのは、そういう行詰りを打開しようとする努力の一つの現われに他ならない。かくて「源氏みざる歌詠は遺恨の事」(六百番歌合・冬)「古歌を本とすれと三句おなし所にをかはあたらしき歌のこころいへくならずとかやそのかみ老父申旨侍ぎ」(仙洞歌合)に明らかなる如く、俊成父子は物語や古歌の世界に歌境の拡充を求めて腐心したのであるが、俊成の「白氏文集古万葉集などはいささか取り過ぐるに咎なきにやあらむまことによくなりにけるも

のはかれを学べると見ゆるに情添ふわざなればなるべし」(中宮歌合)・(五番)は和歌への漢詩文撰取が余情を醸し出す一手段であることを明確にした点で注目に値する発言と言わなければならぬ。俊頼髓脳・奥義抄等の歌論書は歌の解釈に際して中国の故事伝説や詩文を引用するに止まっていたるし、現存する歌合の判詞を見ても、文集の詩に言及した比較的初期のもの(大成五の一)(註一)は単なる語句の穿鑿に陥っており問題にならない。基俊になると詩歌を対比してその本質論に及ぶ傾向がほの見え(大成五の一五二八下五)、白詩を歌題にした大式高遠の歌を「いと哀」と評した例(大成六の一七)もあるが、判詞の多くは証歌証文の観点から漢詩文との関係に論及しており(大成六の一八五〇上三四、同下七)、術学的な実証主義の域を出ないと言つてよい。また俊頼(大成六九〇)行尊(大成六の一)・実行(大成七の二)・(二六上一六)等の加判態度からも本説に関する具体的な見解を抽出することは困難である。一方、清輔の場合には本文のある歌を「をかし」と判じ(大成七の三)、原詩の余韻を認めて勝と定めた判例(大成七の二)に出会すけれども、「凡そは本文を詠歌事は古人誠之昔歌にはいともみえず就中に歌合にはよしなき事なり」

(大成七の二三)の否定的口吻が物語る如く、漢詩文撰取に対する彼の態度はやはり消極的であつたと言わざるを得ない。所詮、正治和宇奏状で「教長清輔ともうたてしき時候也」と難ぜられ、それを承けて後に定家も「可謂道之恥」(自筆本)と記したように、六条家の歌人には源氏物語、白氏文集、延いては漢詩文全般に関する文学的  
理解の欠如していたことが推察されるのである。かように見てくるならば漢詩文受容に臨んで示した俊成の積極性は歌論史上に於てかなり意義深いものであつたことが理解できよう。

そこで俊成の判詞に徴して和歌と漢詩文との関係を瞥見すると、大体④大成七の指摘に終始し基俊譲りの術学趣味・考証癖を思わせるもの(飛重家朝臣和歌合・雪三番)、⑤詩に類似の表現を求めて歌語・素材の適否を断定した例(住吉社歌合・旅宿雨十四番)、⑥中国の故事・伝説が連想されて興味深いとしたもの(中宮亮重家朝臣和歌合・恋十番、民部等)、⑦表現・趣向・構想等の点で供給源となつた詩文にも触れ、その巧みな漢詩文受容態度を称揚したものの(雷社歌合・霞九番、後京極殿別自歌合・九、⑧歌の背後にある漢詩文の余韻を明らかに念頭におきつゝ判を加えた例(民部卿家歌合・晴月十三番)の五段階に分たれる。その核心は勿論④にあるわけであるが、⑤⑥⑦に該当する判詞から次の事柄が帰納される。まず「詩(或ハ故事)(の心)思ひやられて(或ハ思ひ出られて、おぼえて)おかし(或ハ優なり、宜し、いみじくみゆ、幽玄にみゆ)」といつた評語が目立つ。換言すれば、新古今時代の  
の本歌取と同様に、歌の背後に詩文の風情を連想させることによつて表現効果の複雑化を図ろうとする姿勢が窺えるのである。次には(1)右(唐さきやしかの浦わに月すめははるかにうたふ沖の釣舟

観宗)はことなくいひくたしたるさまなから新羅の御まへより眺望しくたしたらむきこそは侍らめと見るやうに侍うへに棹歌一曲釣魚翁といへる詩の心とおほえて心ほそくきこゆ

(三井寺新羅社歌合・湖上月五番)傍線筆者、以下同じ。

に適例を見る如く、当該歌・所引の詩ともに何らかの意味で自然現象もしくは風土的景観に裏打ちされた視覚的映像を伴っている。更に気分醸成に参与した詩文並びに詠出された歌の情趣内容は寂寂の響きを含みもつものが主体となっている。俊成の所説はほとつ以上のように要約されよう。

しからば定家はどうか。俊成の場合の④⑤⑥に相当する加判傾向は、定家のみならず同時代の他の歌人にも屢々現われるので、こゝでは例示しない。注目されるのはやはり前述⑤⑥(特に⑥)に対応する判詞である。

(2)右(人)はこす拂はぬ軒のきりのはに音なふ雨の首そ淋しき

通具)雨滴梧桐山館秋といへる景気かよひはへるにや此雨の

をとはいとよよろしく聞え侍れは殊為勝(内裏秋十五首)

江海遊遊の愁に堪えかねて呷つた酒も醒めた、折しも深夜の雨が山

館の梧桐に滴り落ちて愈々旅愁を添える―そうつた原詩(白氏文集

千載佳句の居處部山館に所収)の面影が連想されて通具の歌を一層味わい

深くしているといふのである。同歌合の十六番にも

(3)右歌(風)すさふ桐の落葉に跡たえて窓ふかきよの秋の村雨

雅経)空階雨滴落葉窓深などいへる古きこゝろ何となくおも

ひいてられてゆへあるさまに侍れと左(中略)も又おもかけあ

りてえんに聞えはへれはおなし程の事にや侍らん

とある。所謂景気の歌を高く評価する風潮は俊成(右大臣家歌合

十一番・月)や定



八〇〥白七七七(今日開看生蠶魚)。八〇三〥礼記・月令の孟春(東風解凍)と倭四②・白二八七四。八〇九〥倭一九②。八一〇〥新四七。八一六〥白一三七(春池岸古春流新 影投南山靑澗)。八一八〥白六〇八(傾心向日葵)。八二二〥倭一九九②③④・白三二二一。八四七〥倭四二五。八四九〥倭五五四①・白九七八(小閣重裘不怡寒 遺愛寺鐘欹枕聽)。八八七〥史記・晋世家第九(重耳謂其妻曰待我二十五年不來乃嫁其妻笑曰犁二十五年吾家上柏大矣)。八九六〥新九三五②。九一六〥倭一九。九一九〥倭五二・白六三一。九九〇〥六二三に同じ。九九三〥三六三に同じ。九九五〥蒙求の蒼頡制字など。一〇一三〥倭一一五・白三二四四。一三三七〥倭三四五・白一二八七。一三三九〥倭五五四①・白九七八。一四四六〥倭二二一①・白七一五。二〇六〥倭一九②。二〇八〥蒙求の孟嘗還珠など。二二四三〥白駒過隙(莊子の知北遊篇など)。二二四五〥倭四二六②。二二八六〥倭六五八。二三六五〥白一五六(可怜身上衣正單 心憂炭賤願天寒 夜來城外一尺雪 曉駕炭車輾水漣)。一四三三〥倭五五五・白一〇七九。一四三七〥倭五五九①②。一四八三〥倭六八〇③④。(拾遺愚草中)一五一〇〥倭二七・白六三三。一五四二〥新七二②。或は倭四四五②・白九四一か。一五四三〥白一三一(唯向深宮望明月 東西四百廻円)。一五七七〥三六三に同じ。一五八一〥倭七四三・白一一〇七。一五八二〥二四三に同じ。一五八三〥倭四七一・白二二七。一五九一〥倭三二七。一六二四〥詩經・国風の卷耳(陟彼高岡 我馬玄黃)。一六二六〥白一一〇七(醉悲灑淚春杯裏)。一六三三〥新五七七①・白七六五。一六五八〥倭三〇七。一六七七〥倭六二六③④。一七〇五〥新四四八。一七二二〥倭四三二③④。一七五四〥倭一五一①・白一二八〇。一七九四〥倭七七五①。一九〇

二〥白五九六(在天願作比翼鳥)。一九一三〥倭一一①②。一九二二〥風草の喩(書經の君陳篇や説)論語・顔淵第十二(君子之德風也小人之德草也草尚之風必偃)など。一九五九〥三六三に同じ。一九六三〥倭六八〇③④。一九七二〥史記・孟嘗君伝、倭四一六③④。二〇一一〥倭二六四①②。(拾遺愚草下(部類哥))二〇二六〥八〇三に同じ。二〇五六〥文選・高唐賦序(且為朝雲暮為行雨朝朝暮陽台下)。二〇六九〥倭二七・白六三三。二〇八〇〥倭五四七①。二一四二〥白八六三(望秦嶺上回頭立 無限秋風吹白鬚)。二二二八〥倭一九二③④・白一四五。二二三六〥一九二に同じ。二四七〥山海經の「又東南三百里曰豊山有九鐘焉是知霜鳴」など。二六〇〥三六三に同じ。二三九三〥黄河千年一清(拾遺記)など。二四〇四〥一九二二に同じ。二六一七〥新八三五。二六四〇〥倭四七一・白二二一七。二六五九〥倭四六三④・白一四一。二七一九〥倭四三二①②と倭一五一①・白一二八〇。二七七三〥李嶠百詠(松風入夜琴)。(拾遺愚草員外)二七九三〥一六三二に同じ。二八二四〥倭一八六。二九一六〥新八四七①。二九一九〥白一三一(宮鶯百囀愁厭聞 梁燕双栖老休妬)。二九二一〥倭五五。二九四九〥倭二七一①。二九八二〥倭四五四①②。二九八九〥倭三六四。三〇〇二〥倭三二②・白二四四三。三〇二五〥倭三五二・白一三八六(十月江南天氣好 可憐冬景似春華 霜輕未殺蕪蕪草)。三〇三四〥一九〇二に同じ。三〇四三〥新五八①②。三〇五八〥倭六一①。三〇七一〥四八五に同じ。三一〇二〥一四三三に同じ。三一五九〥倭五五四①・白九七八。三一六七〥倭三〇三、或は倭三〇二・白二四四三。三一六八〥倭二二三・白七九〇。三二七三〥二四七に同じ。三二七五〥白三二五〇(東岸柳先青)。三二九一〥史記・五帝本紀(舜歷山に耕すノ故事)。三三

一二倭三〇七①②。三三五八倭四二五②。三三六一倭四二五  
①。三三九七倭三六四。三四二二倭一八七①。三四四九倭二  
二一・白七・一五。三四六〇倭六八〇③④など。三五四四倭四三  
二③④、倭一五一①・白二八〇。三六〇二倭四三二③④。〔拾  
遺愚草員外之外〕三六九三倭五九八①。三七三三礼記・月令  
腐草為螢、論語・子罕第九〔仰之弥高鑽之弥堅〕。三七三四倭四  
二五②。三七五一倭二一四①。三八〇〇倭三七四②。三八二〇  
倭三三一①。三八三一倭一六①②。三九一二倭四三二③④。  
三九一九倭一一三④。三九四七白波〔後漢書・靈帝紀〕。四〇五  
九倭一五一①・白二八〇。四〇七九倭三七四。四〇九九倭  
三〇七①②と倭五五五②・白一〇七九。四二二八倭二七七三に同じ。  
四一四〇三従の道〔儀礼・喪服〕。四一五五揆、扇で月を招く〔出  
典不明〕。四一五九一五九に同じ。

(III)

三〇倭一六四②。三六倭七四五③④、或は白一六一の佛か。八  
九倭二七二七〔幻世春來夢 浮生水上蘊〕。九一倭四〇四②。四  
一八倭五二・白六三一。四八七七八九に同じ。五八三倭二二六  
五九一倭六四四①。五九八倭之後今亦猶今之視昔後之覽者亦將  
有感於斯文〔王羲之「蘭亭記」〕、又は倭七四一③④。六〇八倭子猷  
尋戴的故事〔蒙求など〕。九九一倭六三①。七〇七白六六〔古墓  
何代人 不知姓与名 化作路傍土 年年春草生〕。七五五倭六〇四  
②③か。八五三上句は李夫人や楊貴妃のことか〔拾遺愚草〕。一〇一  
五倭白二九九童稚成人 園林平喬木。一〇五一倭二三五。  
白八六〇。一三三倭一一五・白三三四。一二二〇倭五三一  
②・白二七八七。一二一七倭五四七①。一二二八倭一八七①。

一三四一倭六〇八に同じ。一四三〇倭七七九③④。一五四七倭  
三六七①・白八八七。一六二七倭蘇武の故事か。一六四四〔II〕の  
二〇五六と同じ。一七四一倭五四七①。一八二八倭四六三④・  
白一四一。一八三一倭二六四①②。一九二七倭新二八三②。二〇  
二一倭二四〇①②、倭三五九①・白九一三。二〇四〇倭一一五。  
白三三四。二〇五四倭六四。二〇七六倭二一九①。二一〇五  
倭一八二①。二一五二倭七七九③④。二三八七倭新八四七②。  
二五五〇倭四〇四②。二六八〇倭七四二・白三〇七九。二七八  
〇倭五九〇①②。二八八三倭新九三三・白一六二。二九三三倭一  
九二③④・白一四五。二九六九倭二六七。二九八八倭新五〇三①。  
三〇四四倭五三二②・白三〇九八。三〇六三倭二三五②・白八  
六〇。三一四四一一三八に同じ。三五五七倭七四一③④・白二  
二一六、文選の「楊仲武誄」〔潘安仁〕など。三七三七倭一八二①。  
〔註〕右の〔I〕〔II〕〔III〕に於て単なる漢数字は冷泉為臣氏編「藤原定家全歌  
集」の歌番号である。出典に關し既に先学の指摘ある歌番号には右に傍線  
を施した。▽典拠詩文の中で倭漢朗詠集と新撰朗詠集〔各々「倭」「新」との  
み表記した〕の詩文は日本古典文学大系川口久雄氏校注、古典本庫小林  
芳規氏解説に附された番号で示した。①②③は第何句目の詩句であるか  
を意味する。例えば〔II〕の「三八三」倭二一六①は定家の「日にみ  
かく玉きのみやのさくら花春の光とうへやをきけん」が上記の倭漢朗詠集  
の第一一六番目の詩文の第一、二句「螢日螢風 高但千顆方題之玉」と関  
係のあることを示す。白氏文集の篇目は花房英樹氏著「白氏文集の批判的  
研究」第三部の綜合作品表〔同書四九八〜六八三頁〕の番号で代表させた。  
例えば〔II〕の「八一六」白一三七は定家歌八一六番の典拠詩文の篇目が  
上記作品表第一三七番目の「新樂府13昆明春水満であることを示す。白詩  
は統国訳漢文大成本より引用した。▽〔II〕〔III〕の「拾遺愚草員外之外」に  
は存疑歌も数首含まれているが本論での考察の対象にはしなかつた。鷹三

百五十一首は調査の対象から除外してある。▽次の例に該当するものは(Ⅱ)(Ⅲ)に提示せずに省略した。七夕伝説をはじめとする中国古来の年中行事及びそれと関係のある伝説、月中に桂樹ありという故事、雁書のご故事、擗衣を題材にしたもの、その他、万葉古今の頃から代々の勅撰集に多く詠まれて歌人の常識となつてゐる内容を扱つたもの、字訓詩より暗示を得た字訓の歌、漢詩文の翻訳語を含む歌など。

まず(Ⅱ)に於ける詩文の作者は三十人を超えるが、中国の詩文を撰取した定家の歌数は本朝詩文に基づくものの約二倍に達し、前者の三分の二は白詩によつて占められている。次いで多いのは張説・謝觀及び本朝の菅三品・篤茂・源順・保胤等の作品に依拠したものであるが、いずれも各々十首に満たない。これを出典別にみると、(A)倭漢朗詠集・(B)白氏文集と倭漢朗詠集の二書・(C)白氏文集・(D)新撰朗詠集・(E)白氏文集と新撰朗詠集の二書・(F)その他の漢籍に所収の詩文に拠つた定家歌の比は大体、27・18・8・5・1・16となる。つまり典拠詩文に於ける白詩の優位は争えぬ事実であるが倭漢朗詠集の存在もまた無視できないことが判然としよう。そして典拠決定に困難が伴なうのもこの為であつて、(Ⅱ)の中には原詩文↓定家歌の受容過程を辿つたものの他に、両者の間に①倭漢朗詠集等の詞華集、②古歌、③源氏物語等の介在が想定される例も存するのである。例えは

(4)江のみなみわか葉の草もみとりにてはるのかけなる神無月か

な 三〇二五

(5)この里は冬をく露しもいのるいからければ草のわか葉そ春の色なる

三三三八

は「十月江南天氣好 可憐冬景似春華」(倭三五(二)所収)のみならず原詩の第三句「霜輕未殺蕙華草」にも拠つてゐることは明白であるが、上記(B)

(E)には朗詠詩句を媒介に間接的な撰取を行なつたと思われる作品の数が多のである。②の例として一六三二が、また③の例としては(6)さとひたるいぬのこゑにそきこえつる竹よりおくの人のいゑるは 三九四

○宮は御馬にてすこし遠く立ち給へるに里びたる声したる犬ども

の出で来てののしるもいと恐ろし(源氏物語・浮舟、日本古典文) (学大系本による、以下同じ)

○守家一犬迎人吠(倭五六六)

(7)竹のかき松のはしらはこけむせと花のあるしそはるさそひける 六二三

○所のさま絵に書きたらむやうなるに竹編める垣しわたして石

の階松の柱おろそかなるものから珍らかにをかし(源氏物語)

○石階柱竹編墻(白九) \* 「桂柱」は、平安時代書客の白氏文集(酒井

研究一四〇頁参照) 「白氏文集の批判的研究」

そなる 七八〇

(8)をのつからうちをくふみも月日へてあくればしみのすみか

○紙魚しりといふ虫の住みかになりて古めきたる徹くさなながら跡

は消えず(源氏物語)

○今日開看生蠶魚(八七七)

(9)もろともにくくりあひけるたひまくらなみたそそくはるの

盃 一六二六

○御土盃まゐりて酔の悲しび涙そくぐ春の盃のうちと諸声に誦

じ給ふ(源氏物語)

○醉悲瀧涙春杯裏(白二)

や四二・二二五・二五八・三九一・九九〇等が掲げられる。なお詩

句撰取の間接性については今井源衛氏の指摘されるような套語(註5)の問題も残る。例えば一五九・二〇五六に詠みこまれた王質入仙の故事や文選高唐賦等は当時の文人の常識であって殊更に原典を云々するまでもないかも知れないのである。

詩文を歌中に採りこむ際の手法に目を転ずると、

(10)鳥は雲はなはしたかふ色つきて風さへひぬる春のくれかた

二九二

の如く、典拠詩「留春不用関城固 花落随風鳥入雲」と対比しなければ理解に苦しむ例は僅少である(三九一)。また故事を「あらは」に詠み原詩文が「つよく慥に」聞えることを忌避した為であろう、

(11)星のかげのにしにめくるもおしまれてあけなんとする春の夜の空 三〇四三

の如く、詩文(「春夜欲明 望牛漢之西転」)を直接翻案した例は少数あるけれども、拾遺愚草員外所収の藜の歌に集中しており、過去推量の助動詞(二九六)、引用の意味を表わす助詞「と」(二九〇二)や「むかし」「もろこし」等の語を使用して本説を明示することも少なく、(II)の多くは本歌取で言われる隠引法(註6)によって漢詩文を撰取している。なお(II)の定家歌を四季・恋・雑に三分した時の百分比は63・3・34となる。かくて詠歌大概という「時節之景氣」に重心がおかれ、「世間之盛衰」「物由」には朗詠集の雑の項目に該当する内容が多くて恋の占める割合はとるに足らぬものとなり、「白氏文集第一第二帙」は朗詠集等に取められて人口に膾炙した詩文であるとも言えるのである。

詩文の影響で素材或は歌の内容が拡大されたことも確かである。

一見、禁中宿直の体験、洛外逍遙の見聞に制作動機のあると考えら

れる作品(七二・七六・七五等)に典拠のあったことが判明すると失望しないでもないが、同時に歌の世界にある種の広がりや驚かされているわけであって、そこに何らかの意義を認めて然るべきであろう。たゞ、珍しい題材・内容を扱った例として前掲(8)の他に

(12)身をしほるすみのやすきをうれへにて氷をいそくあさの衣手

一三六五

○可怜身上衣正单 心憂炭賤願天寒 夜来城外一尺雪 晓駕炭

車輾氷轍(五六)

(13)年をへてなれけんみやのつはくらめうらやみたえてのちもい  
く春 二九一九

○宮鶯百囀愁厭聞 梁燕双栖老休妬(三二)

等が目につくけれども、(6)(8)は既述の如く源氏物語よりの移入であり、(12)には好忠の「深山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふる小野の炭焼」(註7)に先蹤らしきものが見出され、(13)の詩句は広く流布していた新楽府の一部であるから、これらの作品が歴史的・共時的に見て当時の歌界で大きな反響を呼びおこしたかどうかという点になると甚だ疑問である。なお(12)(13)に関連して附言すれば、(12)は「宮市為貞元末年最為病民之政」(蘇仲翔選註 元白詩選 二二四頁)の状態にあった宮市を批難した詩を受け、(13)の白詩は「怨曠」を感む(同詩)ものであるが、兩首とも諷諭詩の主張が生かされておらず、後出(四)の杜詩に対する関係と同様に、断章取義的な撰取に終っている。これは定家の生きた歴史社会的環境を考慮に入れるならば当然であるが、(II)に於て二以上の詩文に依拠したものは少なく、大部分は原詩文の一、二句を定家(というよりもむしろ千載佳句・倭漢朗詠集・新撰朗詠集の撰者たる維時・公任・基俊)流に解釈し受容している。



続いて詞・心から風情の問題に及びたい。石田吉貞氏が指摘され

る如く(「藤原定家の研究」)、定家の歌の対句法は漢詩文のそれに影響

されたかと思われる。朗詠詩句「雪月花時最憶君」(四七三)を念頭

においた歌は既に式子内親王集(統国歌大観)に見られるが、定家の「

白たへの色はひとつに身にしめと雪月花のおりふしはみつ」(三九四)

の如く体言の羅列や助詞の省略による簡潔な歌調(三二四、三三三)

も漢詩の詠法に基因していると見てよい。また漢詩の翻訳語は早く

から歌合の場でも問題になったが(大成七の四)、定家の「むらさきの

庭」(二〇)「冬のかげ」(二八)等も「紫庭」(例千載佳句)「冬景」

(例として後)のような詩語との関連から生れたものである。(他に「雲

のころも」「雲のかげはし」「れいの声」「はこやの山」「春の色」

「山まと」、仏教方面からきた「かみなぎ道」「こかねのきし」「ひつ

じの歩み」等々)新奇な漢詩的発想の表現が歌合の座で次々に開拓

され(六百番歌合・恋、そういう風潮の中で定家の「まなこにみてる」

(三九〇)「月おいて」(三五)も「紅楼満眼日」(二七)「月老」(後四〇)

等の詩句から採用されたのである。「雲凝る」(九七〇)に関しては

夙に赤羽淑氏の御指摘があるが、次の例に於ても詩句が和語にやわ

らげられることなく、いわば訓読されたまゝの形で歌中にその痕跡

を留めていて注目される。

(四秋をやく色に見ゆるいふき山もえてひさしきしたのおもひ

も 一二四五

○焼秋紅葉火還寒(後四二)

(四影ひたす水さへ色そみとりなるよものこすゑのおなしわか

は

に 八一六

○春池岸古春流新 影浸南山青澗澗(三十七)

兩首の初句に類似した詩句表現は「焼春」(後二四)「焼浪」(後五)

天」(後五)の如く散見するが、(四)の初句では原詩の山居秋晩の趣き

を転じて紅葉を恋心の比喻に用いている点で目新しく、(五)は白詩の

「春流新」「青澗澗」という表現と映発しあって新緑の印象を一層

鮮やかなものとしている。しかし(四)より十年前に光行が「あきをや

く紅葉の色のもし火にこの下闇もさもあらはあれ」(百詠和歌第六)

と詠じているので、前引(四)の場合と同様に、(四)の初句が時人の耳

目をどれだけ聳動させたかという点になると俄かに断じがたいので

ある。語句の問題として今一

(四)風はみなよものこすゑをつたひきてくらきこゑにも色そみえ

ける 三九〇一

に見る如き感覚的に錯綜した表現が掲げられる。元来、漢詩は字数

の制約をうける為に「青々とした新樹の林間を吹く風」を「青風」

(後六)と簡略に表わす(勿論、これには詩人)必要に迫られることがある。

同様に「暗夜に吹く風」を「風声暗」(八三)と表現する。虫に「鳴

自暗」(後三)といふ、雨音に「暗声」(後八)という。(四)の第四句は如

上の漢詩的な表現の影響によると思われる。「こゑ」に対応する聴

覚的表現を予想する読者の心は「くらし」(視覚)によって欺かれる

が、そこに斬新な印象の生れる契機が存し、それが作者の意図する

所でもあったわけである。

舞姿の形容「廻雪」(新樂府)から月光にことよせて「雪をめぐ

らす」と見立てた心を「をかし」と評したのは俊成(在吉社歌合)で

84

あるが、定家もまた、「ひとへに風情を先と」することに警告を発しながら(宮河歌合、一冊六番)、一方で一首の趣向・構想を漢詩文に学んでいる。紺碧の池水を瑠璃の玉と見立てたもの(三三〇)、「露応別淚珠空落」

(倭二)を基に棚機姫の心を思い遣った歌(五三七)、漢詩文に詠まれた自然現象によって構想を立てた「一ふし」ある歌(四四〇)等がかなり詠

まれているのである。劉禹錫の「遊糸線乱碧羅天」(倭一)に拠った

ゆくりかへしはるのいとゆふいくよへておなしみとりのそらに

見ゆらん 八〇九

も、俊成の判(別事社歌合、露九番)より類推すれば、「おかし」き作品として鑑賞されたことであろう。また観念的な発想の三二七五・二二二八等が恰も写生歌の如き観を呈するのは、漢詩文を通して自然観照を行なった結果であろうが、殊に

⑧村雨に花たちはなやおもからむにほひそ落る山のしづくに

三二一五

は、「盧橘」を「花たちはな」に変えて「にほひ」と対照させている点で古今集以来の伝統的な表現を脱していないけれども、原詩「盧橘子低山雨重 棕櫚葉戰水風涼」(六一三)の清新な自然感情がよく生かされていて爽快な感触を与えてくれる。「時節之景氣」を効果的に撰取した例に数えてよい。

最後に定家の作品に於ける漢詩文撰取の技法を内容上から区分すると次の如くなるであろう(前掲Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)の歌を詳細に分類すれば多岐にわたり收拾がつかなくなる。今は説明の便宜上きわめて恣意的に下記三類に分けてみた。第一は撰取された漢詩文が単に歌の一部分に関係するもので、いわば枕詞・序詞・成語的な役割を果

すにすぎなかったり、歌の一部に働きかけても意味的には一首全体の中心をなさない類である(四八三、一二〇八、一五九、三八三二等)。文学的価値という点では、一首の表現が複雑になり典拠詩文の存在が連想されて作者の術学的欲求を満足させるに止まり、重視するほどのものではない。第二は

⑨さゝれいしはいはほとなりてあすか河ふちせのこゑをきかぬ

みよ哉 一二八六

○淵変作瀬之声 寂々閉口 沙長為巖之頌 洋々満耳

(古今集・真名序、倭六五八)

⑩ちかしも秋のけしきの見ゆる哉みたるゝほたる山のはのは

し 二八二四

○螢火乱飛秋已近 辰星早没夜初長(倭六)

や前掲⑪の如く、典拠詩文をそのまま翻案した歌群である。第一の場合と同じく本説の連想による余情はあまり期待できず、一首に味わいのある作は少ない。第三は詩文の内容を受けて少し変化もしくは延長し一首の情趣を敷衍増加したものである。内容的に価値のあるのはこの第三類に属する作品であるから、以下その代表的な例を抜萃して説明に及びたい。

⑪昔のうへにきのふの紅葉たきすてゝ秋のはやくに誰遊ひけむ

三三四九

は、旧遊を懐しく回顧している「林間燠酒焼紅葉 石上題詩掃緑苔」(倭二)を逆に推量の形で受けて風流な遊びに思いを馳せたわけであるが、一一四六・三一五九や

⑫春もおし花をしるへにやとからむゆかりのいろのふちのした

かけ 九一九

○惆悵春婦留不得 紫藤花下漸黄昏(後五)

等とともに所謂白楽天の風流・閑適詩的なものへの傾斜を示している。また

○さかのほる波のいくへにしほれけむあまのかはらの秋のはつ

風 三九六

○張博望之到牛漢 沂十万里之濤(新六四)

○関の戸をとりのそらねにはかれともありあけ月は猶そさしける 六六八

○遊子猶行於残月 函谷鶏鳴(後四)

からは異国の故事・伝説に描かれた夢幻的な世界への憧憬が窺える。槎に乗り河源を尋ねて牽牛織女の處に至った張騫の身を思ふ作者の心情は甚だ浪漫的であり、俊成の言葉を借れば「まことに万里の波おもひやられてはるかにこそおぼえ侍れ(広田社歌合・海上眺望七番)」ということになる。函谷関の故事に基づく関は、朗詠詩句の「残月」のイメージを歌中に詠みこむことによって、岩根を踏みながら関路を越行く旅人の姿を一層引立てゝおり、清少納言の贈答歌(枕草子一九〇頁)等にはみられぬ詩的香気を漂わせている。雁書(日本古典文学大系本)の妻の心境を思い遣り(〇五)、上陽白髪人や王昭君の身になって哀れな境涯を歌う(一九四三)のは、枯渇した抒情を叙事的要素で以て救おうとする試みであろうが、また如上の傾向に一脈通ずるものを含んでいゝ。

○霞か花うくひすにとちられてはるにこもれるやとのあけはの 八一〇

これは「秦城楼閣鶯花裏」(新四七、千載佳句)に拠って一首を仕立てたわけであるが、智巧的撰取の段階から進んでやゝ風情のある表現に

まで高められていると評してよい。一首から感得される春曙の趣きは正に王朝歌人の理想とした情調の一端を代表するものであったと思われる。そのことは、深山の花を詠じた

○山人のすまていく世のいしのゆか霞に花は猶にはひつゝ

二〇八〇

○石床留洞嵐空拂(後五四)

或は白詩背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春(後二)を心において春

夜の趣きを詠んだ

○ふかき夜を花と月とにあかしつゝよそにそきゆるはるの鉦

一五一〇

○山の葉の月まつそらのはふより花にそむくるはるのともし

火 二〇六九

また一六三二や

○花さかりむなしき山になくさるの心しらるゝはるの月かけ

七六六

○花明上苑(輕軒馳九陌之塵)猿叫空山 斜月鑿千巖之路(後二)に於ても同様であつて、全て春の花、月を題材とするが、文字通りの「はなやかさ」はあつても表面的にすぎず、歌の背後に静けさ・憂い・さびしさ・ものあわれさに似た響きが感じられるのである。

こういつた歌を創作及び鑑賞の両面から考えた場合、明月記の「更又掌燈連歌和歌等」(略中)及鶏鳴教声雨漸滂沱遠路天明者不便之由被急

出猶徘徊空階雨滴之句数返」(月廿九日条)から想像される朗詠的環境は、詩句の知得を前提とする新古今歌人の詩文撰取の技法に幸いたことはいうまでもなく、同時にそういう共通の知識が、

○ひとりきくむなしきはしに雨おちてわかこしみちをうつむこ

からし 一六五八

③のきの雨のむなしきはしをうつたへのねられぬ夜半の秋そつ

れなき 三三二二

○三秋而官瀟正長 空階雨滴

万里而鄉園何在 落葉窓深(後三)

等の鑑賞に甚だ効果的な役割を果たしたことであろう。前引(3)で定家が「空階雨滴落葉窓深」といへる古きころ何となくおもひいてられて……(もとおもかけあり)……と判じた如く、恐らく彼と同時代の人々もまた朗詠された時に髣髴する愁賦の面影が③③のしみじみとした「あはれ」な情趣内容を更に深めている点に詩文撰取の意義を認めたと思うのである。かくて前掲三十一首の例歌と既述の俊成・定家の漢詩文受容に関する理論とを勘合するならば、定家が詩文撰取に際して企図した点は自から明らかになる筈である。(Ⅱ)に於て彼の表現しようとした気分情調は主に閑雅・憂愁・哀寂と評されるべき性質のものであり、それにふさわしい内容の漢詩文を探り入れて具象的客観的な情景描写のうちにそれを象徴させようとしたのである。殊に②①②並びに(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)の中で秀逸と目される作品の大半が「時節之景氣」に関する絵画的なイメージで支えられているのも、また詩文の出典が朗詠詩句を中心とする古典的教養の世界を幾許も出ないのも如上の詩法故であって、歌人共有の漢詩文以外に典拠を求めることは詩語の構成する映像の客観性消失を意味し、定家の創り出した詩法が不成功に終ってしまふからであった。彼の和歌に於ける詩文の影響は、詞から心へ、智的趣向等から風韻の摂取へと内面的に深まりを見せつつ多方面にわたるけれども、要点は右に尽きると思われる。

以上は(Ⅱ)(Ⅰ)(Ⅲ)を中心に定家の歌を一括して論じたのであるが、(Ⅱ)の作品を制作年代順に通観すると、文治期・建久期・正治・建暦期・建保期・承久期各々の歌数の比率は(Ⅱ)全体を百とした時に大体14・41・10・11・7となり残りは初学期と晩年に分散している。建久期の作品だけで四割を占め、建久期の良経邸歌壇の特質を第一に漢詩的環境に認められた藤平春男氏の御論考(建久期の歌壇第九号)が興味深く想起されるのであるが、それに文治期のものを合わすと所謂達磨歌時代の漢詩文受容歌は(Ⅱ)の過半数に達し、詩文撰取に對するこの時代の定家の意欲が如何に旺盛であったかを教えてくれる。前引(23)(文治)・(13)(20)(24)(建久)・(29)(建久)・(15)(25)(建久)・(27)(建久)・(30)(建久)の如き注目すべき作品は全てこの新風形成期の所産である。しかし量的にはともかく、質的には(14)(建保)・(12)(建保)・(21)(28)(建保)・(18)(建保)・(26)(承久)・(31)(承久)や一九六三(嘉禄元年)・一四三七(貞永元年)が示す如く、詩文撰取による新境地開拓の試みは晩年まで続けられているのである。そういう試行の跡を年代順に徹視的に眺めた時に如何なる変化が認められるか、それは彼自身の歌論・歌風の変遷とどのように対応しているのか、(Ⅱ)を中心に見た作品が新古今新勅撰両集で優遇されないのは何故か等々残された問題は多い。そして何よりも良経邸に集った歌人達の漢詩文受容の実態が追究されぬ限り本稿で述べた定家の詩文撰取に関する特色も意味をなさなくなる。(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)の作品の内実に迫った考察も要請されよう。これらはいずれ別の機会を得たいと思う。

(註)

(本学大学院学生)

1 秋谷朴氏編著「平安朝歌合大成」第五卷の一五二頁下段九行目のこと、以下同じ。(一九頁下段につづく)